



I-OWA マンスリー・セミナー座談会より 山崎氏 & 岩城氏を囲んでフリーディスカッション

座談会：、山崎 元氏、岩城みずほ氏、参加者のみなさま
レポーター： 赤堀 薫里

岡本 | 興味深いお話をありがとうございました。恐らく一番、みなさんが知りたいのは、就業中の貯蓄率が、実現可能な金額と思えない時は、どう対応するかということではないでしょうか。



岩城 | 多くの人の貯蓄が出来ない理由は保険です。私が保険の記事を書いているので、そういう方が相談に来られるのかも知れませんが。保険で10万円位払っている方がいらっしゃいます。若い夫婦でも二人で働いていると1000万円超えている家計も多いので、その中で保険代10万円が払えてしまいます。保険は何十年も元本割れが続いている中、貯金だったら元本割れしない。その話をすると腑に落ちるようです。保険をやめて適切な場所で貯蓄をしてくれます。

岡本 | 本来、あの貯蓄率は、普通の人であれば十分に達成可能であるはずが、その他の保険等で、構造的に減ってしまっている部分があるため難しくなっているということですね。

岩城 | 保険を見直すと割と大丈夫です。

参加者 | 奨学金を利用して大学へ入学した結果、社会人になった時には、すでに300万円もの借金を抱えている人達の数字が増えている気がします。また家計的に、子どもの教育費が手当できていない世帯も感覚的に増えている気がします。家計を見直せばなんとかなるレベルなのか。また、夫婦二人で働いているからな



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

んとかなるという話も聞きます。その辺りの肌感覚がよくわからないので、教えてください。

岩城 | 基本的に奨学金や教育ローンを使わずに親が教育費を払っていくことがベストだと思います。奨学金を返すことができないお子さんも多い。社会人になってから、手取り20万円位の安い給料の中から2~3万円位の奨学金を返していくわけです。貯蓄ができなくなり、その子の生活設計も狂ってしまうことは一つの問題です。

雑誌の企画で、ある家計相談をした時のこと、これ以上子どもさんの教育費にお金をかけたら、老後破綻してしまうという家計でした。今は奨学金の金利も低くなっているため、どこまで借りるかは問題として、どうしても教育費が足りないのであれば奨学金を借りるという結論を出しました。

若い世代はまだ見直しが効きます。しっかり貯めていくというのが基本です。今、一つの傾向として、共働きで非常に収入が多く、30代半ばで結婚して子どもが生まれ、教育費にお金をかけすぎています。保育費にプラス受験対策としての習い事をさせているので、教育費がものすごく膨らんでいるのが現実です。子どもが幼い時は貯め時にも関わらずここまで使っているのかという問題は、今の新しい問題ですね。



山崎 | 私は、奨学金を利用して教育費を賄うことに対して割合賛成です。借金も良い借金と悪い借金があります。例えば会社なら事業計画がしっかりしていて、ひどいレートでなく銀行から借りられるのは良い借金と言えるでしょう。

大学を出た人とそうでない人の生涯年収差は数千万円あります。多分その数千万円の中に本人の素質に基づく部分と、大学から得るものの両方が含まれているでしょう。ただ、500万円の投資でおそらく何千万円か稼ぎ出すのであれば、大学のレベルや教育の水準もありますが、大学へ行くことの価値はある。それに対して、ファイナンスをつけるのにもものすごく低金利で借りることができます。良い借金であれば、親と連結して考えれば、子どもが奨学金を借りて親が返してもいいわけです。

もう一つは、大学へ行くことによる経済的メリットは、もっぱら子どもが享受します。働くことで収入を増やすのだから、これはペイしていると計算を行い、責任を持って借金を返すべきです。社会に出る時に借金を持って社会へ出るのはいかかわいそうだというのは、親の感情が過大であって合理性を欠くように思います。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

もう一つの手段は「アルバイト」ですが、大学で6年教えていた感じからすると正しくない。例えば、アルバイトは時給1,000~1,100円です。一方、就職して年収500万円になると時給2,500円になるわけです。何年間かファイナンスでつなぐことによって、時給2,500円で返せるようになる借金というわけですから、大学に来ていながら漫然と部活やバイトで時間を潰して大して勉強しない、ろくに英語もできないで卒業していくという大学生は全く大学を無駄にしています。大学の投資を有効にするということを前提の奨学金でファイナンスするということは、家計全体にしても、その子にとっても親にとっても合理的です。親はフルに教育費をかけて満足のいく状態にしようとする自分のお金が残らないようになるし、自分の老後の状態が悪くなることで子どもに負担をかけることになるかもしれない。だから、合理的な借金は使うのがいいと思います。

参加者 | 山崎さんは12回転職されましたよね。なぜ転職されたのですか？

山崎 | 正直に言うと、この会社においてもこれ以上の面白みがなさそうだなと思った時に次にカードをめくれる権利を持っているのであればめくってみようという気分でした。もちろん人生は計画的に進められるわけではないのでこのような結果になったわけです。合理的な転職理由の一つとしては、仕事を覚えるための転職が考えられます。例えば、私は三菱商事の財務部でしたが、「財務部で資金運用しているよりも、投信会社や生命保険会社で資金運用した方が仕事のレベルは高いだろう。仕事を覚えたい」という気持ちで投信会社へ転職したのが最初の転職でした。

次に、転職を合理化できるもう一つの理由として、覚えた仕事を有効に使う場所を得るための転職があげられます。信託銀行で運用を覚えて、外資系の企業に移り沢山お金をもらうための転職のようなケースです。

三番目の転職理由としては、ライフスタイルを調節するための転職があると思います。私が42歳の時にセカンドキャリアの事を考えて転職を考えました。当時、某生命保険会社の運用部にいて、これはつまらないと思うようかなと思いました。典型的なのは外資系の運用会社で転職先を探すことですが、どんなに長く働いても60歳までで、その後やる必要がある必要があり、稼ぐ道も必要です。そこで考えたことは主な勤めの所得を縮小して、時間を自由にしてもらい、副業を育てようと思いました。そんな都合のいい就職先がUFJ総研でした。ここで給料を減らして、別の会社へ勤めてみたり、友人がやっているベンチャーにちょっかいを出してみたりと、そうこうしているうちに、経済評論家の仕事が少しずつ増えてきて将来につながる仕事が出来てきました。いきなり全部を辞めて起業するというのは、私のような凡人でお金もなく、家族がいるとリスクが大きい。例えば、会社の勤めを小さくして副業を走らせるという方法で老後対策を考えるというのは、一つの方法であるかもしれません。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

人生は結局その時々で決めてきたように思いますが、事後的に自分の転職を理解するとすれば、意義のある転職の理由は3つ。12回の転職を自己評価すると、7勝4敗1引き分けです。

参加者 | 自分のキャリアやスキルの主導権を自分で握っているという話ですよ。企業側に翻弄されず、自分で一生かけてキャリアやスキルを作っていく意識改革。

山崎 | 会社の仕事の都合で嘘をつかなくてもいい気持ちのよい人生を送るためには、自分で自分の人材価値を少しずつ作り、時々自分の側で会社を辞める立場を持たなくてはなりません。

岡本 | 本来その権利は皆持っているわけです。だけどいつの頃からか、最初に安泰な会社に入って、悪いことをしないでじっと耐えていけば定年退職を迎える。退職後も何とかクラブみたいなのがあって、昔の仲間と絵画を見たりゴルフをしたりして、亡くなった時はその時の社長から弔電がくるみたいなね。全部揃っていたわけですよ。それは、もうとつくに崩れているでしょうね。山崎さんのお話も岩城さんのお話もキーワードは自立ということになるのではないかと思います。今日は有益なお話をありがとうございました。